法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-01-03

ニコライ・ネフスキー旧蔵『おもろさうし』 について : 天理図書館蔵『おもろさうし』 巻十、解説と校異・翻刻

末次,智

(出版者 / Publisher) 法政大学沖縄文化研究所 (雑誌名 / Journal or Publication Title) 沖縄文化研究

(巻 / Volume)

50

(開始ページ / Start Page)

459

(終了ページ / End Page)

496

(発行年 / Year)

2023-03-31

(URL)

https://doi.org/10.15002/00030089

ニコライ・ネフスキー旧蔵『おもろさうし』について

天理図書館蔵『おもろさうし』巻十、解説と校異・翻刻

文書」と呼ばれていることは、加藤九祚著『天の蛇』の記述や引用で、早くから知られている。 る。この時、ネフスキーが日本に、一部の資料を残し、これが天理図書館に所蔵され、「ネフスキ シア語教師として赴任する。そして、一九二九(昭和四)年九月に三七歳で、革命後のソ連に帰 る。その間、一九一九(大正八)年五月に小樽商業学校のロシア語教師嘱託となり、一九二一(大正 四)年三月、二二歳でペトログラード大学派遣留学生として東京に留学する。その後、留学を終え ロシアに帰国する予定であったが、母国でロシア革命が起こり、そのまま日本に滞在することにな イヌや東北地方、そして、沖縄本島、宮古島を探索したロシアの言語学者である。一九一五(大正 一〇年)の東京滞在を経て、一九二二年(大正一一)四月、前年に開校した大阪外国語学校に初代ロ ニコライ・ネフスキー(一八九二年~一九三七年)は、日本の民俗学の草創期に日本に滞在し、ア 末 次 智

ネフスキ

私は、一九九二(平成四)年に、天理図書館で、故嘉手苅千鶴子氏とともに、バジル

レン旧蔵の『おもろさうし』(王堂本)を見出したさい、加藤の著書をもとに、

べた結果が本稿である。 スキー文書」の中に、『おもろさうし』の写本があることを知り、この写真版を手元に取り寄せ、調 を知った。それで、 種多様な自筆資料群) するネフスキー文書(ネフスキーが帰国直前にイソ夫人の実家に遺した、日本滞在中一四年余りの多 裏には「天理図書館では、ネフスキー生誕一二○年にあたる平成二四(二○一二)年に、本館が所蔵 天才言語学者ネフスキー― で、二〇一五 れを機会に、ネフスキーについて再度調べていて、同図書館のホームページで公開されているチラシ(の) 由で、閲覧できなかった経緯がある。今回、加藤氏の著書に増補版の「完本」があることを知り、こ の資料についても図書館で問い合わせたことがあるが、そのさい、まだ資料が「未整理」だという理 (平成二七)年一一月二二日から二九日に、「天理大学創立九○周年記念特別展 同図書館を一昨年の九月二八日に訪れ、これらを確認した。そのさいに、「ネフ を目録化して、広く研究に供してきました。」とあり、資料が整理されたこと ―自筆資料に見る軌跡――」が開催されていたことを後に知った。チラシの

チラシ裏の「主な展示資料」一覧を見ると、『おもろさうし』は含まれていないが、それ以外に興 ものが含まれているのだが、とくに私が関心を持つネフスキーの「琉球研究」については、 别

稿を期したい。

さて、本書は同館の「ネフスキー文書」の中に含まれていた『おもろさうし』第一○巻の写本であ

cm)で、和紙 ても、ネフスキーの自筆ではないと思われる。書誌を記すと、縦約24・5㎝、見開き約3㎝ る(ここでは仮に「ネフスキー本」と呼ぶ。以下、「ネ本」と省略する)。ただし、これは筆跡から見 (紙料不明)に毛筆で記されている。表紙は無い。同館で私が確認したさいは、一葉ず (片面

つ透明のファイルに収められていた。同館の目録には「おもろさうし第十」とある。これまで、この

ような写本があることは知られていない。 ここで、『おもろさうし』の写本について簡単に記しておく。現存の『おもろさうし』は、前年の

首里城火災で失われたものを、一七一○年に琉球王府が再編集した「尚家本」が沖縄県立博物館に所 しかし、こちらは沖縄戦で失われ、

現在ではその行方が

蔵されている。また、そのさいに、これと同時に編集され、神歌主取家である安仁屋家に保管された。 るもの(「内務省本」)もあったとされるが、どちらも存在が確認されていない。現存するものとして もろさうし』(「琉球史料本」)があったとされ、さらに沖縄県庁で写され、内務省に送られたとされ たとされるが、これも沖縄戦後、その存在が明らかではない。この安仁屋副本の子本として、 明らかではない。また、廃藩置県のさいに、安仁屋家本を写した「安仁屋副本」も同家が所有してい 「安仁屋本」もあったことが知られている。 一八八八年から一八九二年にかけて沖縄県知事であった丸岡完爾が収集した『琉球史料』の中に『お

ニコライ・ネフスキー旧蔵『おもろさうし』

は、一八九三年に沖縄県尋常中学校の国語教員として赴任してきた田島利三郎が琉球史料本を写した 461

「田島本」が現存し、これは琉球大学附属図書館伊波普猷文庫に所蔵され、画像が公開されている。

も同文庫に所蔵され、公開されている。さらに、琉球史料本を首里役所長西常央が写した西本(これ(B) は存在が確認されていない)、先に触れた王堂本(第三巻のみ)、これを写した「からの舎本」(同前 きるのはこの本を通してである。同様に琉球史料本から、仲吉朝助が写した「仲吉本」があり、これ これには、安仁屋本、 同副本との校合結果が記されており、現存しない安仁屋本の姿を知ることので

がある。これらを図にすると本解説末尾のようになる。 ここで、ネ本について、池宮正治著『おもろさうし諸本校異表』と、外間守善・波照間永吉編『定

下の校異には、活字本は含まれていない。 通し番号は省略した)、次の数字は行番号(『定本おもろさうし』の行分けによる)を示す。なお、以 濁点、読点、それに空白の校異については取り上げていない。最初の数字は巻内番号であり(全巻の 本おもろさうじ゙をもとに、他写本との校異を記すと、煩瑣になるが、左記のようになる。 ただし、

【ネフスキー本『おもろさうし』巻十、校異一覧/**ネ本**を**ゴチック体**で示す】

「ネフスキー本(**ネ本**)」。 以下、 諸本を下記の如く省略して記す。「尚家本(尚本)」、「仲吉本(仲本)」、「田島本 (田本)」、

また、校異のうち、一重傍線箇所は、田島本よりも上位の写本である尚家本、あるいは(田島本に示

ネ本、表紙は、欠落している。

- 1ノ3「するやに」は、尚本・仲本「するややに」、田本・ネ本「するやに」。
- 2 節名 尚本・仲本・田本・無し。ネ本「むかしはちめからのふし」。
- 尚本・ア本・ネ本「やゝのみしよ」。仲本・田本「やしのみしよ」。
- 尚本・仲本・田本「よら」。ネ本「まら」。

3 の 4

- 3 ノ 9 尚本・仲本・田本「おくと」。ネ本「おゝと」。
- 3 ノ 9 尚本 「しゝと」または「しくと」とある。仲本・田本「しくと」。ネ本「しゝと」。
- 尚本 ・仲本・田本「ほとけ」。ネ本「ほとみ」。

3 ノ 14

尚本 ・仲本・田本「うちいてはおしかけふし」ネ本「うらへてはおしかけふし」。

尚本・仲本・田本「大きみきやときとやりきやふし」。ネ本「大きみぎやときとやりかふし」。

5 ノ 2 尚本 ・仲本・田本「けわいこき」。ネ本「けわい」。

5節名

- 6節名 尚本・ネ本 「―いとめつらかふし」。仲本・田本 「―いとあつらかふし」。
- 7 ノ 11 尚本・ア本・**ネ本**「てかち」。仲本・田本「てりち」。(尚本、 仲本「り」とも「か」とも読

める)

464

巻1ノ31のことを指すかと思われる。

9 節名 尚本・仲本・田本「きこへ大きみちやくによせたるあちおそいかふし」。ネ本「きこへ大き

みちやくによせたるあちおそいかなしかふし」。

10 ノ 2 9 ノ 3 尚本・ア本・ネ本「けわい」。仲本・田本「けわ」。 尚本・仲本・田本「うちちんす」。ア本・ネ本「うちちへす」。

11 ノ 9 ・ 10 尚本、仲本・田本「やねの年」、「むかう年」。ネ本「やねのとし」、「むかうとし」。

11 ノ 18 11 ノ 11 尚本・ア本・ネ本「きやめ」。仲本・田本「ちやめ」。 尚本・仲本・田本「よくかほう」。ネ本「よく」の右に「世う」。

12 ノ 3 尚本・仲本・田本「世うなおさ」。 **ネ本「世うなおせ」**。

13/10 尚本・ア本・田本・仲本「てかち」。**ネ本「てから」**。

14/13 尚本・仲本・田本「めよと」。 ネ本「めとよ」。

尚本・仲本・田本「けやれけ」。ネ本「やれけ」。

14 ノ 2

15/5 ネ本、「こせて」の「こ」の右に「着」とある。14/20 尚本・ネ本「あかるいに」。仲本・田本「あかるいよ」。

16/2 尚本・仲本・田本「またたるよ」。ネ本「またゝるよ」。

16/4 尚本・仲本・田本「まうと」。ネ本「まうて」。

節名 尚本 ア本 ネ本 「てやん―」。 仲本・ 田本 「はせん―」。

17/10 尚本・仲本・田本「ちはなれ」。ネ本「ぢはちれは」。

18、19 ネ本、この2首は欠落している。

22 ノ 1 尚本・ア本・田本・仲本「きこへおわもり」。ネ本「きこゑおわもり」。

25/5・6 尚本・仲本・田本「やれとむ」。**ネ本「やれとも」**。

尚本・ア本・田本・仲本「あかる」。ネ本「あかる

あかる」。

24

ラ フ 7

尚本・仲本・田本「おりよい」。ネ本「おりより」。尚本・仲本・田本「めやらへが」。ネ本「めやべが」。

仲本・田本「ちこよい」。ネ本「ちこより」。

尚本「みやり」。ネ本・仲本・田本「はやり」。

26252525節ノノノ名1097

尚本

26/6 尚本「なかむら」。ネ本・仲本・田本「なりむら」。

26 ノ 7

尚本

「なかむら」。

ネ本・仲本・田本「なりむら」。

26 ブ 16 尚本 仲本 田本 「のきあてれ」。 ネ本「ぬきあてれ」。

27 ノ 2 5 尚 本・ ア本・ネ本 一やくめさ」。 仲本 田本 「やじめさ」。

仲本「ねいしまいしかふし」。ネ本・田本

「ねいしかまいしかふし」。

28節名

尚本

465 ニコライ・ネフスキー旧蔵『おもろさうし』について

28 ノ 1 尚本「いしけくた」。ア本「いしさくた」あるいは「いしけくた」。ネ本・仲本・田本「いし

29 ノ 1 尚本・仲本「いちなはの」。ネ本・田本「いちなわの」。

30 ノ 3 尚本・仲本「こしらい」。ネ本・田本「こしらへ」。

31 節名 尚本・仲本・田本、無し。ネ本「こばせりきよやりほしやかふし」。

31 ノ 1 尚本・仲本・田本「みぢよもい」。ネ本「みちよいもい」の「ちよ」の右に「十三て」と記

31 ノ 3 尚本・仲本・田本「みぢよもい」。ネ本「みてもい」の「て」の右に「ぢょ」と記す。

31 ノ 8 尚本「おとちやん」。ネ本・仲本・田本「おとぢやへ」。

尚本・仲本・田本「ゆみき」。ネ本「よみき」。

31 ノ 7

す。

32 ノ 7 尚本・仲本・田本「たなきよら」。ネ本「ふなきよら」。

尚本・ア本・ネ本「しらし―」。仲本・田本「ししし」。

33 節 名

33 ノ 5 尚本・ネ本・田本「ようとれか」。仲本「ようとれる」。 尚本・ネ本 ・田本「あさとれか」。 仲本「あさとれる」。

尚本・ア本・ネ本「ようとれか」。 仲本・田本「ようとれる」。

尚本・ア本・ネ本「いちや~~」。仲本・田本「いちやし」。

36節名 尚本 ・仲本「うらおそいおもろのふし」。 ネ本・田本「うらおそいおもろふし」。

36 ノ 3 尚本・仲本・田本「きや」。ネ本「か」。

……〈以下、尚本欠落〉 :

39節名 仲本・田本、 無し。ネ本「ふなやれひやしかふし」。

ネ本「や、と」。仲本「やしと」「やくと」「や、と」とも読める。 田本「やくくと」。

ア本

41

ノ 2

41 ラ 12 仲本・ネ本「あかるいに」。田本「あかいるに」。 、かアモサダカナラズ」という。

42 ノ 6 仲本・田本「なよかさのてとりちゃうす」。ネ本、この一行無し。 ア本・ネ本「ふなはら」。仲本・田本「ふなばし」。

42 ノ 10 仲本 ・田本「みなわせ」。ネ本「みなはせ」。

42

ラ 7

42 ノ 12 仲本・田本「たつなせ」。**ネ本「たづなわ」**。

44 ノ 6 仲本 田本「おきしまに、から」。ネ本「おきしまから」。 44

ノ 4

5

44 ラ 15 . 16 仲本・田本「かいふたにかち

右を確認する作業過程で明らかになったネ本の特徴を箇条書きにまとめると、次のようになる。 ア本・ネ本「き、や」。仲本・田本「きくや」。 又かいふたから」。ネ本、この2行欠けている。

ネフスキー本の特徴

a 最初の一首を除き、 うたの冒頭に巻内の通し番号が付されてい

þ 節毎の行分けがなされている。

c ア本系の写本に見られる原注(「言葉聞書」)は、まったく付されていない。

ď ネ本だけの違い、つまり、写し間違いもかなりの数確認できる。つまり、この写本はメモ的なも

のとして書写されたと考えられる。

ネ本にだけしかない節名が三例記されている。

g

ネ本には、

読点は付されていない。

h 語句の句切りでは、読点の代わりに空白が用いられる。ただし、仲本、田本の読点の位置と、こ

の空白の位置はかならずしも一致しない。

j i 節名には、数例を除き、ほとんど濁点は用いられていない。 濁点は、全体的に付されているが、必要と考えられる箇所すべてではない。

されている(b)ことから田島本に類似していることが分かる。つまり、とりあえず田島本の写しだと できる。ネ本の体裁を確認すると、各首毎に巻内の通し番号が付されており(a)、節毎の行分けがな 尚家本で欠落している第三六首以下が記録されており、安仁屋本系統の本であることが確認

は、 本、あるいは たく付されていない。そして、校異一覧で、 判断できる。一方で、 いては、以下に述べるような理由で、別の写本を見て訂正したといちおうは理解しておく。田島本 明治二八年五月一七日には親本である「琉球史料本」との校合を終えている。つまり、ネ本が (田島本に示された)安仁屋本や安仁屋副本と類似を示す箇所を確認できる。これ 田島本にも記されているア本系統の本に付される原注 一重傍線箇所では、 田島本よりも上位の写本である尚家 (「言葉聞書」) $\ddot{\mathbb{H}}$

でネフスキーと最初に会っているのは、東恩納寛惇である。天理図書館のネフスキー文書には、 は筆跡から見て、ネフスキー自身の手によるものではない。私が調べた限りでは、 る。ここで、ネフスキーにこの写本を提供した人物を推測してみたい。すでに述べたように、この本 らなくなるが、ネフスキーが日本に滞在していた時期を考えると、やはりそれは考えにくい。 島本や仲吉本よりも上位の写本であるなら、それ以前にネ本が存在していた可能性を考えなくてはな ネフスキー自身が第三者に依頼して書写させたのでなければ、この本は誰かが提供したことにな 沖縄関係の研究者

恩納が教員をしていた高千穂中学校で「研究」について「発表」したお礼が記されている。さらに、 キー宛の封書がある。その手紙は興味深いもので、全文を引用すると、次のようになる。 同文書には、 七(一九一八)年三月一一日消印の東恩納からネフスキー宛の封書があり、そこにはネフスキーが東 おそらく大正一一(一九一二)年九月一三日と思われる消印の、 末吉安恭からネフス

ニコライ・ネフスキー旧蔵『おもろさうし』

御中城のおもろに出てたるあやごの儀早速貴校に御報申上候 拝啓御手紙披見いたし候 八月卅日午前中御帰宅の由相変らず御研究のこと、存し候 右はおもろ御艸紙の第四巻

りやへさすかさのおもろ御さうし第十頁に出つ

|きこへおしかさかやちよこたにしらせかふし (節名)

一、きこゑさすかさか、よ、そわる、あやこ

とよむさすかさか

もり、おとちやは、さたけて

よそわるあやこのふし(節名)

一、きこゑさすかさか、こへやて、おきもやすま

とよむ さすかさか

きこゑさすかさか、あまへわちへ、あすひよわ

とよむさすかさか

けおのうちは、をしあけて、さんこおり、つきあけて

あお

しよりもり、おれわちへ

またまもりおりわちへ

あやこををとりと註しあり 又あそびなといふ語も出づれば踊の意におもろでも使ひ居ることが、、、 知れ申候 されは昔は宮古のみならず 本島にもありし二覧之申候 右貴急を得申候也 末吉安恭 草 々

ネフスキー学兄

し、沖縄本島でもかつては同語が使われていたことを教える内容となっている。あるいは、このこと 持っていたであろうネフスキーに、宮古島の歌謡「あやご」について、『おもろさうし』の用例を示 これは、大正八(一九一九)年に、宮古島の上運天(稲村)賢敷に会って、宮古島の言葉に関心を

書館の「ネフスキー文書」には、何枚かの名刺が残されているが、その中には伊波のものがあり、こ 他文書で確認すると、ネ本とは異なっている。 がネフスキーが『おもろさうし』に関心を抱く契機となったものかも知れない。ただ、安恭の筆跡を あと、ネ本を提供した人物として可能性が高いのは、やはり伊波普猷だということになる。天理図

れには「東京都小石川区指ヶ谷町四小笠原方」と住所が手書きで記されている。伊波が沖縄を離れれには「東京都小石川区指ヶ谷町四小笠原方」と住所が手書きで記されている。伊波が沖縄を離れ

(小石川区戸崎町)に生活の拠点を移したのは大正一四(一九二五)年のことである。

ネフスキーもこれを伊波から贈られた可能性がある。これにより写本は必要なくなり、 る。この年には、伊波の手になる初の活字本『校訂おもろさうし』(南島談話会)が刊行されており、 のだろう。これらを見ると、ネフスキーと伊波との関係は大正一四(一九二五)年以後だと推測でき 石川区戸崎町から送った絵葉書も残されている。名刺は、この葉書以前にネフスキーに手渡されたも(宮) ネフスキーが大阪で生活するようになって以後である。さらに、同文書には、伊波がネフスキーに小 日本に残した

の安仁屋家に滞在し、 キーは日本を離れており、山内に会ったのは、最初の上京の時である可能性が高い。その時、山 その次は昭和四(一九二九)年三月に上京して、牛込の雪谷に居を構えたが、この年の九月にネフス を学ぶために東京に上京しており、その年の十月には祖父盛熹危篤の報を受け帰省している。また、 された住所は「深川区猿江裏町二九」となっている。 二五歳であった。そして、その三年前、大正一(一九一二)年の八月十七日から一週間 また、『おもろさうし』関係の人物としては、山内盛彬の名刺も残されており、そこに手書きで記 王府おもろ五曲六節を伝授され、 山内は大正四(一九一五)年に田辺尚雄に洋楽 採譜している。だが私は、 山内が、 宜野 王府おも

ろ以外に『おもろさうし』の写本を持っていたということを知らない。

本には欠落している10ノ39も、重複オモロである13ノ65から補われている。さらに、六カ所だけ、 ノ2はその重複オモロである巻22ノ22から、10ノ31はやはり重複オモロの13ノ22から、そして、尚家 異一覧に二重傍線で示したように、ネ本には、他の写本には無い節名が付されたものが三首ある。 を書写したのは、その筆跡から見ても、 所有者の伊波自身ではなく、第三者だと思われる。また、校

だとすれば、やはりネ本を提供したのは、現時点では、伊波の可能性が高いだろう。だが、田島本

べて巻13からだが、やはり重複オモロとの異同が注記されている。こちらでも『おもろさうし』の 「重複」を認識していることになる。田島本には、田島自身の手になる注記が数多く記されているが、

た書き手は誰かということが問題になる。さらに、田島本の上位本をもとに表記を書き改めたのは誰 これも右の異同以外は反映されていない。当時『おもろさうし』についてこのような認識を持ってい

さらに、天理図書館のネフスキー文書には、『おもろさうし』から抄出したノートもあり、これを(ミュ) あるいは、伊波が指示をして書写させたのか。この辺の事情は、はっきりしない。

ニコライ・ネフスキー旧蔵『おもろさうし』

から語彙が引用されている。『宮古方言ノート』は、宮古語辞典の草稿であり、オモロの抜き書きは シア語で訳して抜き出している。また、ロシア科学アカデミー東洋古籍文献研究に保管されている 見ると、巻二、五、八、九、一〇、一三、一四、一五、二二から、巻毎の通し番号を記し、歌詞をおそらくロ か。 『宮古方言ノート』にも、方言の用例として『おもろさうし』から、右以外では、巻一七、一九、二一

そのための準備だろう。こうして見ると、ネフスキーの手元には、第十巻だけでなく、『おもろさう

し』のすべての巻が揃っていたと考える方が自然である。そのうちのなぜか一巻だけが、妻イソの実 474

四四

ネフスキーの交流を示す記録としても貴重なものである。 は、尚家本では欠落している巻十末尾の十首の理解には役立つと考えられる。また、沖縄の研究者と が、すでに述べたように、それでは解決できない表記の問題も存在するのである。だが、この写本 には反映されていない。とりあえずは、これは田島本の下位の写本だと考えるのがもっとも自然だ 家に残され、その後天理図書館に所蔵されたということだろう。たとえば、伊波普猷が大正 した写本があり、これがそうだと仮定することもできるが、ネ本固有の表記は、『校訂おもろさうし』 (一九二五)年に刊行した活字本『校訂おもろさうし』の準備のために田島本、あるいは仲吉本を写

注

- 1 以上は、おもに、生田美智子編 の略年譜」によった。 『資料が語るネフスキー』(二〇〇三年、大阪外国語大学)の「ネフスキー
- (2) 一九七六年、河出書房新社
- 末次「チェンバレンのおもろさうし」『琉球の王権と神話』 九九二年)、同「天理図書館蔵『沖縄祭歌』正誤表」(『歌謡――研究と資料――』第六号、歌謡研究会: 『沖縄祭歌』──王堂本『おもろさうし』解説と翻刻──」(『歌謡-(第一書房、一九九五年) また、同「天理図書館 ―研究と資料――』第五号、

し』(上巻)解説」でも同様に「『英王堂本』も現在では所在が不明となっているのである。」と記されてい さらに、波照間校注『おもろさうし』上〈琉球文学大系1〉(ゆまに書房、二〇二二年)の「『おもろさう チェンバレン旧蔵の『おもろさうし』(英王堂本)は行方が知れない」(「『おもろさうし』総説」)とあり、 九九三年)。なお、外間守善・波照間永吉編『定本おもろさうし』(角川書店、二〇〇二年)には、「この

る。しかし、右のように、天理図書館に所蔵されている。

注(2)が増補され、『完本 天の蛇――ニコライ・ネフスキーの生涯――』(二〇一一年、同社)。注(1)書の存

同書の「増補完本あとがき」の「追記」で知った。

4

(5)https://www.tenri-u.ac.jp/calendar/q3tncs00000yfv4e-att/90th_Nevsky_p.pdf(2021.09.06閲覧)なお、 では、一一月二九日に、「記念講演会」が開かれている。その講演の演者とタイトルは次の通りである。「天 同展 ・ネフスキー旧蔵『おもろさうし』

館名誉教授)とオレグ・リャボフ氏(在大阪ロシア連邦総領事)が参加している。なお、同年には、 トワーク」(大阪大学名誉教授 ア文化省遺産研究所主任研究員 エフゲニー ・バクシェフ氏)、「自筆資料から見るネフスキーの人的ネッ 理図書館とネフスキー」(天理図書館資料部長 生田美智子氏)、そして、特別ゲストとして、加藤九祚氏(国立民族学博物 三濱靖和)、「ロシアにおけるネフスキー評価の変遷」(ロシ ロシア

請求記号は、下記の通りである。「088-イ2-A22」(翻刻番号1401) (北海道地域史)のご教示で知った。そのさい、狩俣繁久氏(元琉球大学)が現地で講演を行っている。

でも、生誕一二〇年の講演会が開かれていたことを、北海道大学の、簑島栄紀氏

(アイヌ文化史)、谷本晃

- (7)以下は、断らない限り、池宮正治「四 テキスト/第一章 『おもろさうし』概説」(島村幸一編『琉球文 476
- 本/『おもろさうし』総説」(外間・波照間編、注〈3〉書。)を参照した。

(池宮正治著作選集1)』笠間書院、二〇一五年)、波照間「十一 『おもろさうし』の原本と書写諸

学総論

- 8 沖縄県立博物館監修『尚家本おもろさうし』全二二冊、ひるぎ社、一九七九年。比嘉実編『尚家本おもろさ (沖縄研究資料4)』法政大学沖縄文化研究所、一九九三年。外間・波照間編、注(3)同書、には、尚
- 9 琉球大学附属図書館「琉球・沖縄関係貴重資料デジタルアーカイブ」で公開されている。また、これをすべ て翻刻したものに、齋藤郁子「田島本おもろさうし」(『沖縄芸術の科学』第一二号、沖縄県立芸術大学附属

家本の書影がすべて収められている。

- (10) これも、琉球大学附属図書館「琉球・沖縄関係貴重資料デジタルアーカイブ」で公開されている。 研究所、二〇〇〇年)がある。読みにくい田島手書きのノートを、書き込みも含めて活字化した労作である。
- 11 西常央の生涯と沖縄研究の関わりについては、末次「沖縄の西常央-――近代的沖縄研究への架け橋とし
- て――」(『京都精華大学紀要』第三六号、京都精華大学、二〇一〇年)を参照のこと。
- (13) 外間·波照間編、注(3)書

12

南西印刷出版部、

一九八〇年。

14請求記号「088-42-C2」 ら東恩納寛惇宛の書簡(大正九〈一九二〇〉年付)が収められており、その中で「却説、 岡正雄編 『月と不死 (東洋文庫18)』(平凡社、一九七一年)には、 おもろに対句とし ネフスキーか

て出て来る言葉は、 必らず同意味であるといふ事を未だ讃成しがたく思ふ例も御座いますから、……」

(一七六頁) と『おもろさうし』に触れる箇所があることから、この時、 ネフスキーがこの写本を見ていた

- 15 請求記号「088-12-C2」(翻刻番号40)
- $\widehat{16}$ 請求記号「088-12-D2」
- 17 外間·比屋根照夫編「年譜」『伊波普猷全集』第一一巻、 平凡社、一九七六年。
- 18 請求記号「088-12-C3」

19

請求記号「088-42-D2」

- 20 以上、 山内の動きについては、「年譜」『山内盛彬著作集』
- 21 請求記号「088-72-B341」これには、一部仮名と漢字で節名が記されている。

22

文化研究所、二〇一六年、同「『宮古方言ノート』における形容詞」『琉球の方言』第四一号、法政大学沖縄

おもろさうし』からの引用はさらに増えると思われる。

23

本稿の脱稿後、

田中水絵

にも、

アレクサンドラ・ヤロシュ「『宮古方言ノート』における親族語彙」『琉球の方言』 文化研究所、二〇一七年。これは同研究所の『宮古方言ノート』の一部であり、すべてが整理されれば 天理図書館のネフスキー文書が引かれているが、ネフスキー本には触れていない。しかし、ネフス 『歌の島・宮古のネフスキー』(ボーダーインク、二〇二二年)を手にした。これ 第三巻、 沖縄タイムス社、一九九三年。 第四○号、 法政大学沖縄 477 ・ネフスキー旧蔵『おもろさうし』について



一大ぬしぎや 天とゞろ するやに

ゑけ

せ

ぢまさてちよわれ

又大ぬしぎや あやこばまするやに 又大ぬしぎや あめとゞろするやに

又大ぬしぎや しづこばまするやに

又大ぬしぎや まはへあな

に ちよわちへ

又大ぬし とりのもり ちよわちへ

又大ぬしぎや 国まわり しよわちへ

むかしはちめからのふし

又てだいちろく

か

又せのみはぢまり

2一むかしはぢまり や てたこ大ぬし

ゃ

きよらや てりよわれ

又おさんしちへ 又てだはちろく みおれは

又あまみきよ 又さよこしちへ は みおれは よせわちへ

又しまつくれ て、 は よせわちへ わちへ

又しねりきよ

又こゝらきの しまく

又くにつくれ

て、

わちへ

又しまつくる 又こゝらきの ぎやめも くにく

又てだこ うらきれて

又くにつくら ぎやめも

又しやり は すぢや なしよわれ 又しねりや すぢや なすな 又あまみや すぢや なすな 又せのみ うらきれて

ニコライ・ネフスキー旧蔵『おもろさうし』について

3一ぢ天とよむ大ぬし ほしのかた もちろち

へちよわれ

又天ちとよむ わかぬし

又や、のみしよ めしよわちへ

又せぢまつるぎ さしよわちへ

又ほしのかたのみきゝうび

又あもと まらしよわちへ 又こゑかすの なりきよら

又お、と し、と しきよわちへ

又おくと まうと ふみよわちへ

又なみとゞろ ふみよわちへ 又かさなおり さしよわちへ

又きもき、とうし さきたて 又ほとみたかべ さきたて

又あまおれ大きみ さきたて

又国おれ大きみ さきたて

又てにきよら は しだけり 又天かなし しちやげわ

うらへてはおしかけふし

4一さやはたけみちやけ ゑよゑ

やれ

おせ

又さんこおり あつる

又そこにやだけみちやけ

又よきのいろの つまぐろ 又さんみやあしやげ あつる

又金きやくら よりかけ 又ましぢよきやの つまくろ

又玉しりぎや よりかけ

又なむちや きやくら よりかけ

又ておのいと まはるび 又玉くみぎや よりかけ

又くもこたづな よりかけ

又大きみ の めしよわちへ

又よなはばま おれわちへ

又くにもり ぎやめしよわちへ

又ばてんばま おれわちへ

又浦まわり めしよわちへ

又さきまわり めしよわちへ

又てたかあな にあよみわ 又あかるいに あよみわ

5一大きみぎや いとめつら めしよわちへ 大きみぎやときとやりかふし

※十三、120 しよわちへ みもんとあり

あまへて けわいしよわちへ

又あさとれ が しよれは

又国もりぎや 玉めつら

又いたきよら 又ようとれ が は しよれは

又たなきよら はおしうけて おしうけて

又ふなこ ゑらて のせて

又てかち ゑらてのせて

へて しまより まさり よわちへ

大きみぎやいとめつらがふし

又くにもり ぎや ゑかとやり

又けおのよかるひに

又けよのきやるへ るひに

6一大きみぎや 時とやり おれわちへ あま

又大きみぎや しま内どみ めしよわちへ 又くにもりぎや けおのはねうち めしよわ

481 ニコライ・ネフスキー旧蔵『おもろさうし』

7一きこへせぢ あらきみ だしましとよも

おもかは あがて おわちへ

十三ニなさ

わかいきよ いきやて みちやる

十三みよわちへ

又とよもせぢあらきみ

又ようどれかしよれば

Þ

なおり月せとし

又あさどれかしよれば 十三あける月せと、

又いちやきよらはおしうけて

又たなきよらはおしうけて

又ふねこ ゑらて のせて

又てかち ゑらて のせて

9一あおりくものあんし ぢやくにしらたる

又ておりくものあんし うちちへす もどれ

又ぐすくおやいくさ

又しよりおやいくさ

又いたぢや せめつけて

又かなぢや せめつけて

又かなぢや せめいぢやちへ

又いたぢや せめいぢやちへ

又まゝき おいつめて

又も、そ きりふせて おいつめて

又てらほ

又な、そ きりふせて

うらおそいおもろのふし

8一、に同じ。

10 一いしてんかおもろ ま人のけわいちよ み

又かなてんがおもろ

又けおのよかるひに

又きこゑあんしおそい 又けおのきやかるひに

又とよむあんしおそい

又きやのうちあやみや

に

又きやのうちくせみや 又物まいり しよわちへ に

又てらまいり しよわちへ

きこへさすかさかよなおせかふし

りの めつらしや さにある

又とよむこばせりきよ

11一きこゑこはせりきよ みやりほしや

しよ

又けおのよかるひに 又けおのきやかるひに

又てだかあな はたかべて 又あがるいは

たかべて

又やねのとし ならは

又よくかほう するむ世う 又むかうとし ならは

又しよりもり しられ、 又のちかほう するむ

又またまもり しられゝ

又あんしおそい にしられ、

又た、みきよにしられ、

又もゝと きやめ ちよわれ

又ひやくさ ぎやめ ちよわれ

きこへこばせりきよみやりほしやかふし

ニコライ・ネフスキー旧蔵『おもろさうし』について

又きこゑくにせりきよ	つな やぢよく ゑやれ おそい やぢよく	13一としましまおそい や ふれまて こけ	きこへこばせりきよやれけがふし		又くになかねとうり	又しまなかにねとおり	又むらさきの のちくも	又むらさきの あやくも	又てたがあなにみやれは	又あがるい に みやれは	又けおのあけだちに	又けおのあけとまに	又とよむさすかさかよ	なおせ一世うなおせ	12一きこゑさすかさか い よけ よう よ
又てかちゑらてのせて	又ふなこゑらてのせて	又たなきよらは おしうけて	又いたきよらは おしうけて	又ようとれかしよれは	又あさとれかしよれは	又とよむこはせりきよ	14一きこゑこばせりきよ やれ け	あかんおゑつきかかいとりかふし		又てからゑらてのせて	又ふなこゑらてのせて	又たなまよらは おしうけて	又いたまよらは おしうけて	又ようどれがしよれは	又あさどれが しよれは

又しちよきやかたはる に

又まきしやかたはる に

又さゝらなみ たては

又めとよなみ

たては

又すづのなり しよれは

又も、そ ほこ もたちへ

又かねのなりしよれは

又なゝそ ゆみ もたちへ

又な、そ したげわちへ

又も、そ さだけわちへ

又あかるいに あよで

又てだかあなに あよで

ゆそい

又うみなおすせぢあらせぢ 又かせなおすせぢあらせぢ

15一しよりま人 けらへま人 だりじよ 又くすくま人 けらへま人

又たまさ ゑらて さ、ちへ

又ゆろい ゑらて こせて

又ぎぼくびり もゝそ たうちへ 又みねまくびり なゝそ たうちへ

又これど しより これど くすく

又くすくちよわるあぢおそい 又しよりちよわるあぢおそい

16一大ぬしきや せぢあらせぢ 大ぬしきや天と、ろかふし

にまたゝるよ

又大ぬしぎや よどりあすび

又大ぬしぎや まうてあすび

又かずしらぬゑそこかすおしうけて 又さにしらぬみおねかずおしうけて

しらたる け

・ネフスキー旧蔵『おもろさうし』について 485

17 しよりくになるあんし

又くすくくになるあんし

又しよりちよわるあちおそい

又くすくちよわるあちおそい

又けおのよかるひに

又大きみはたかべて

又けおのきやかるひに

又かみしもはあとへて

又くにもりはたかべて

又ぢはちれはろそいて

又いしべつはこので

又いしらこはおりあげて 又かなべつはこのて

又なみのうへはげらへて 又ましらこはつみあげて

> 又物まいりしよわちへ 又はなくすくけらへて

又てらまいりしよわちへ

又こんげんもほこりよわちへ 又かみ も ほこりよわちへ

あけしのかふし

20一かみがなし かみきよら やもどるくも はきやり こがねしま あおるこがせ

はちへおわちへ

又ようとれか しよれは 又あさとれか しよれは 又のろがなし のろきよら

又たなきよらは 又いたきよらは おしうけて おしうけて

又ふなこ ゑらてのせて

あかる三日月かふし

21 一 ゑ け

ゑけ

さいわ

けおより あいいてるむ

たるの さくら しけくと あかるいのみづかわ

おりさちへ

又ゑけ ようとれがしよれは あさとれかしよれは

又ゑけ

てだがあなのみづかわ

又ゑけ

又ゑけ 又ゑけ たなきよらはおしうけて いたきよらはおしうけて

又ゑけ ふなこゑらてのせて

又ゑけ てかちゑらてのせて

22一ゑけよう きこゑおわもり やゑけよう

しま

ょ

うちとり よわちへ

又ゑけ よう けおのよかるひに

又ゑけ 又ゑけ 又ゑけ よう よう よう きこへあちおそいや とよむあちおそいや けおのきやかるひに

又ゑけ 又ゑけ よう よう せたかこは たかべて 大きみは たかべて

23一きこゑこばせりきよ しよりのめづらしや 又とよむこばせりきよ

又いたきよらは 又ようとれか しよれは 又あさとれか しよれは おしうけて

又てかちゑらて 又ふなこゑらて 又たなきよらは のせて のせて おしうけて 又ゑけ よう とよむおわもりや

487 ニコライ・ネフスキー旧蔵『おもろさうし』について

24
24 一 ゑ け
あがる三日月や
ゑけ
かみぎやか
又めやべ
が
みしゆ
ゑらて

なまゆみ

又ゑけ あかるあかほしや

又ゑけ あかるほれぼしや

又ゑけ かみがさしくせ

又ゑけ あかる あかるのちくもは

又ゑけかみかまなきゝおび

又おりよりは する~~ 又しらくちや が よそ ゑらて

又あかきいやこ つくとく 又ちこよりは するく

又よすきいやこ つく/〜又あかきいやこ つく/〜

又とかいふね なて つくく

又やかいふね なて

はやりほしやかふし

26一みなにまちらす が かほう

もゝゑらび

25一あれや この かいとり

しよりくになるあんじかふし

又とむにまちらすが

又とかしきのあかなさ

又なりむらのあかなさ

又なりむらのそやけご

又も、ゑらび、はおしうけて

又ゑとむあんし

又きもちや おなぢやらの

やれとも

又やそゑらび	
はおしうけて	

又ぬししない 又せとしない おうね おうね

又かせむかて わきあがて

又きたむかて わきあがて

又あめふりやり

すみあがて

又おさんだけ 又くれふりやり ぬきあてれ すみあがて

又まこちあな ぬきあてれ

あけしのがふし

27一中べあやのてにきみ ぎや やぐめさす

みとろかね

みおやせ

又くもべあやのてにぬしがやくめさす

又あふくものよろいは つみあげて 又すゑのすへとみに つみなおちへ みおやせ みおやせ

> 28一いしけしたよう とまり

> > かほう

よせつける

又かねしかねとのよ

又かなへつ はこのて 又いしへつは このて

又いしけ よりなおちへ

又くすぬき はこのて 又なたら よりなおちへ

又やしろたび 又やまとたび のぼて のぼて 又やまとふね

このて

又かはらかい にのぼて

又てもちかい

にのぼて

又わりかね 又おもいぐわ かためす のためす

ねいしかまいしかふし

ニコライ・ネフスキー旧蔵『おもろさうし』について

29一いちなわのとよみうら きよやら あまへほこよる

又あらさきのとよみうら

又けおのきやかるひに

又けおのよかるひに

又あらこみや おろちへ

又いなこみや おろちへ

かいふたの大ころかふし

30一たいらこしらへや おれなおせ かみく

又もりのこしらへや

又けおのきやかるひに 又けおのよかるひに

又ねだてもり 又がぢやもり におれわちへ に おれわちへ

> 又な、そひちへ おれわちへ

又あまみやふた おれわちへ

又しねりやふた おれわちへ

又しよりもり おれわちへ

又またまもり おれわちへ

こはせりきよやりほしやかふし

31 一 おおみづのみちよいもい

おゑちへ こう

てはやせ

又ふるさとの みていもい

又みちよいもいか あらたび 又みちよいもいか うゑたび

又よざけもりどころ

又よみきもりどころ	
33一きこゑおにのきみゑ	

又おとぢやへ は さそやり

又ちおとちや はさそやり

ささてとあり

十三 ともからは

又あさとれか しよれは 又とよむ おにのきみ

又ようとれかしよれは

又たなきよらは おしうけて

32一あかんおゑづき が

かいとり

こばせりやれけかふし

又あさとれか しよれは 又ねはんおゑづき ぎや

しよれは

又てかちゑらて のせて 又ふなこ ゑらて のせて

34一きみなおりわかきみ うらくくと

おせ

たいらこしらいかふし

又あさとれか 又きみわかく 大きみ しよれは

又ふなこゑらて 又ふなきよらは 又いたきよらは 又ようとれか

のせて

おしうけて おしうけて

又てかちゑらて

のせて

しらしよきなわかふし

又ようとれか しよれは

又いたきよらは おしうけて

ニコライ・ネフスキー旧蔵『おもろさうし』について

しけかけて こがせ

やれしく

又いたきよらは おしうけて

又たなきよらは	
おしうけて	

又ふなこゑらて のせて

又てかちゑらて のせて

せしきよかなくすくかふし

35一しよりいちやくか こちへきよる

きよ

らや

又くすくいちやくか

又あさとれか しよれは

又ようとれか しよれは

又いたきよらは おしうけて

又たなきよらは おしうけて

又てかち ゑらて のせて 又ふなこ ゑらて のせて

うらおそいおもろふし

36一まさりきよ か ふなやれ

ゑ

おきにや

又うきあがり かふなやれ あんしおそいすちよわれ

又なけち て、 おもな

又しもの世のぬしのそろい

又あよて て、 おもな

又まほこりのおなちやら

又あんし又のあんしのそろい

又すゑつきのおなちやら

又あさかもとかまへ 又おやのもとかまへ

又こうては はきよわな 又こうては ゑらたな

又のすで はちやる

又かくちへ ゑたる

又さけかめ に 入たる

くにちやかふし

37 一くめのこいしの か ふなやれひやし

又も、うらこいしのか 又あさとれか しよれは

又ようとれか しよれは

おしうけて おしうけて

又ふなこゑらて のせて

又たなきよらは 又いたきよらは

又てかち ゑらて のせて 又つきのわか きよらか

又てたのわか きよらか

こかせかふし

38一くめのこいしのか ぢみちあよむやに

39一くめのこいしのか ふなやれひやしかふし

又も、うらこいしのか

こがせ

又ようとれか しよれは 又あさとれか しよれは

又いたきよらは おしうけて

又ふなこゑらて のせて

又たなきよらは

おしうけて

又あかずやりおそい 又てかちゑらて のせて

又あかるいにむかて 又きみのやりおそい

又てたかあなにむかて

わかきよ か

たまよせ おうね くにぢだやか ょ

又てかちゑらて のせて	又あさとれか しよれよ	又もゝうらこいしのか

又ようとれか しよれは

又いたきよらは

おしうけて

又たなきよらは おしうけて

又てかち ゑらて のせて 又ふなこ ゑらて のせて

> 41一ほかま大やこ か やゝとおせ やちよこた かいふたの大ころかふし

又いちへき大やこか

又けおのよかるひに

又あさとれか しよれは 又けおのきやかるひに

又ようとれか しよれは

又いたきよらは おしうけて

40一くめのこいしのか とりぎや とうとり

こかせかふし

又たなきよらは おしうけて

又てかちゑらて 又ふなこゑらて のせて のせて

又てたかあなにあよみよわ 又あかるいにあよみよわ

又ふなこゑらて のせて

又たなきよらは 又いたきよらは 又ようとれか しよれは 又あさとれか しよれは 又も、うらこいしのか

おしうけて おしうけて

42一あけしの、かみにしや やれけ

又あけしのゝのろにしや

やほう あふらちへ

又なよかさのせとちやうす

又そできよらか ゆどりちやうす

又かせのてや ほうふぐろ に しない

又なみのてや ふなはらに しない

又ておのいと は もであわしやり みなわせ 又ておのいとは おしあわしやり たづなわ

43一よなおさか ゑそこ ゑけやれけ

又かみにしやか ゑそこ

又ようとれか 又あさとれか しよれは しよれは

又いたきよらは おしうけて

やゝの

又うらまわり しよわちへ

又てかちゑらて 又ふなこゑらて

のせて のせて

又さきまわり しよわちく

又てたかあなにあよみよわ 又あかるいにあよみよわ

41一きこへおしかさ とよむおしかさ やうら うちいてはさはしきよかふし

おちへ つかい

又き、やのおきしま き、やのもいしま

又ひるかさりから 中せとうち かち 又おきしまから ひるかざり かち 十三 中せちとあり

中せと

又中せとうちから かねのしま かち

おしうけて

ネフスキー旧蔵『おもろさうし』

又かねのしまから せりよさに かち又おすもりにから あすもりに かち又あすもりにから さちきやもり かち又おかまるにから さきよた にかち又がなひやふから さきよた にかち又おやとまりから しよりもち にかちスおやとまりから しよりもち にかち

又大ころかまみや に 又かなもりの大ころ やふらおせ やちよく け